1 はじめに

最初に基本的な事項として、環境問題の概念や歴史について紹介します。

1）環境問題の概要

まずはじめに、環境問題とはどのような問題なのか、その特徴や国内を中心とした環境問題の歴史について、概略を解説します。

① 環境問題とは・・・・・・・・・P2

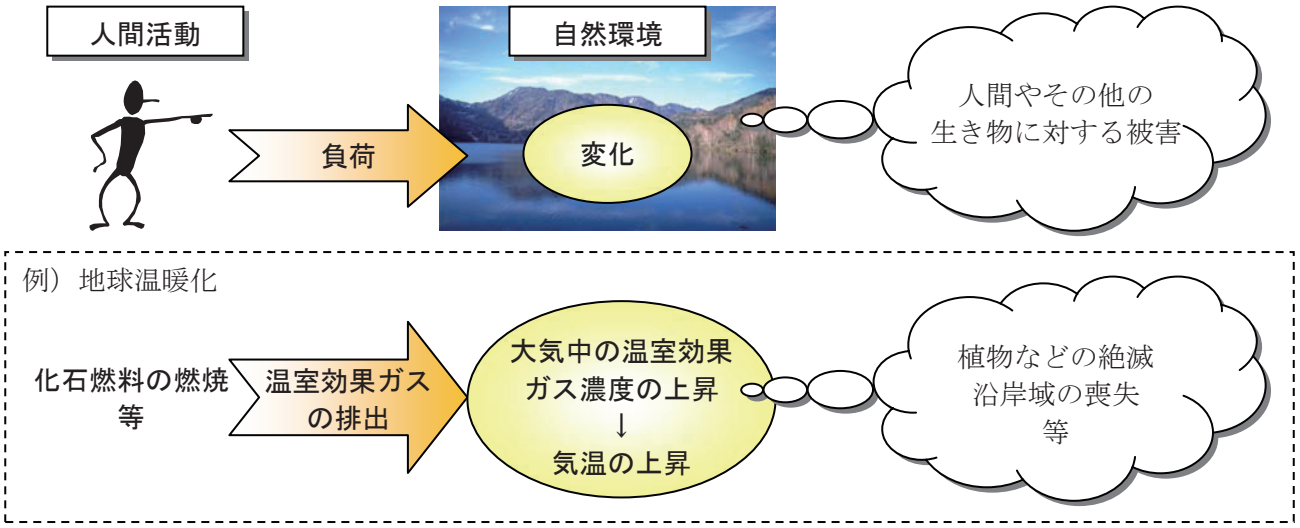
② 環境問題の種類・・・・・・・・P2

③ 環境問題の歴史・・・・・・・・P3

④ 環境に関する取組の基本的な考え方・・・・P4

1　環境問題とは

一般的に環境問題とは、人間活動が周囲の自然環境へ負荷を与えることで、自然環境の変化をもたらし、それによって人間や他の生物が被害を受けることを意味しています。例えば、地球温暖化問題は、化石燃料の燃焼によって大気中に出された二酸化炭素などの温室効果ガスが原因となって、気温が上昇し、植物などの絶滅被害などにつながっています。

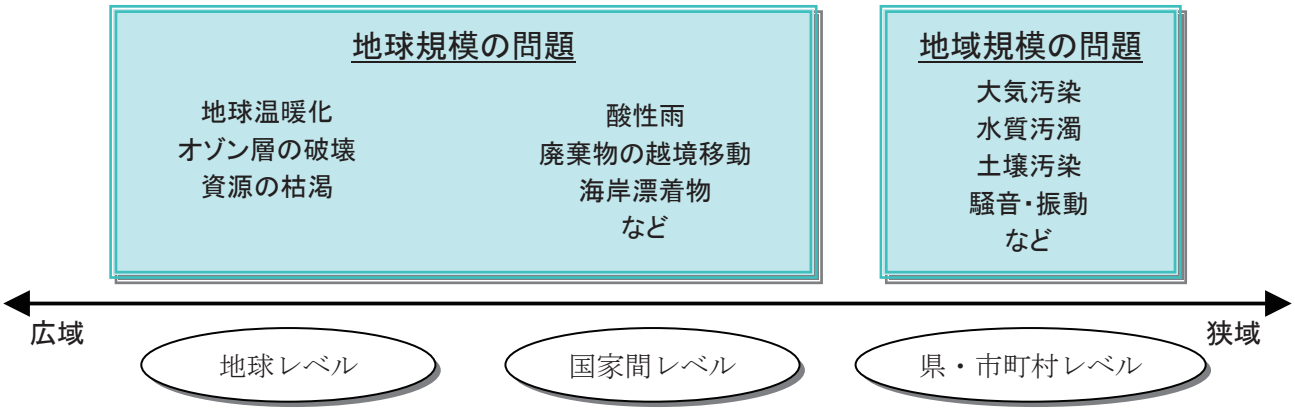


ミニ講座　環境容量

人間活動が自然環境に負荷を与えても、ある程度は自然のもつ浄化作用や修復作用などによって解消されますが、これら作用の持つ能力を超えた負荷を与えることで環境問題が発生します。この自然環境が受け入れることのできる負荷量のことを、環境容量や環境収容力などと呼びます。そのため、環境問題を解決するためには、自然環境への負荷を減らしていく過程で、その負荷が環境容量の範囲内になるようにして、その状態を持続させることが重要となります。

2　環境問題の種類

環境問題には、様々な種類があります。地球温暖化問題のような地球規模の問題から、光化学スモッグのような影響範囲の狭い地域規模の問題まで、幅広い問題が挙げられます。



3 環境問題の歴史

これまでの歴史を見てみると、環境問題の大きなきっかけとなったのは、18 世紀後半に始まった産業革命以降の産業の発展です。石炭や石油などの化石燃料を大量に消費しながら、活動の範囲を拡大し、人口増加や大量生産・大量消費に象徴されるような社会経済システムを形成してきた結果として、自然環境に対して排気ガスや排水などにより大量の負荷を与え、環境問題を引き起こしています。

１９５０年代～１９６０年代　産業公害

○産業公害の深刻化＜１９５０年代～１９６０年代＞

日本国内で環境問題が注目されるようになったのは、戦後の高度経済成長期です。工業化の発展に伴い、国民生活は飛躍的に豊かになりましたが、一方で工場等から排出された重金属や有害化学物質等による環境汚染が引き金となって、深刻な公害問題が発生しました。特に、イタイイタイ病（富山県）、水俣病（熊本県）、新潟水俣病（新潟県）、四日市ぜんそく（三重県）は四大公害と呼ばれ、産業公害の典型的なケースとされています。

このような状況を受けて、1970 年代にかけて、大気汚染や水質汚濁、騒音・振動、悪臭などの多くの公害対策に関する法律が整備され、対策が進められました。

【四大公害の概要】

	イタイイタイ病	水俣病	新潟水俣病	四日市ぜんそく
発生地	富山県神通川流域	熊本県水俣市 不知火海沿岸部	新潟県 阿賀野川流域	三重県四日市市 石油コンビナート周辺部
発生源	三井金属鉱業 神岡鉱業所	新日本窒素肥料 水俣工場	昭和電工 鹿瀬工場	中部電力等 6 社
原因物質	カドミウム	メチル水銀化合物		硫黄酸化物等の排煙
被害内容	腎臓障害、骨軟化症	視野狭窄、運動失調、難聴、知覚障害		ぜんそく等の肺疾患

１９７０年代　都市生活型公害

○都市生活型公害の拡大　＜１９７０年代＞

高度経済成長が進んだ結果、大量消費・大量廃棄の現代型ライフスタイルが定着し、自動車利用に伴う大気汚染や騒音・振動、生活排水による水質汚濁、廃棄物の増大などの問題が顕在化してきました。それまでの産業型公害とは異なり、市民の普段の生活が原因となって発生する、都市生活型公害へと形が変わったことで、工場と市民の間にあった加害者と被害者という対立関係から、市民自らが被害者でも加害者でもあるという問題構造の変化へとつながっています。

１９８０年代　地球環境問題

○地球環境問題への注目　＜１９８０年代～＞

ローマクラブが 1972 年に発表した「成長の限界」において、人口増加や工業発展がこのまま進んだ場合、地球上の天然資源が枯渇し、環境汚染が自然の持つ容量を超えて進行すると警鐘を鳴らしたことが大きな契機となり、国際的に環境問題が注目されるようになりました。そして同年、ストックホルムで開催された「国連人間環境会議」において「人間環境宣言」が採択され、国際的な協調と連携による対応が始まりました。

その後、1980 年代になると、地球温暖化問題とオゾン層の破壊という 2 つの地球環境問題が注目されるようになりました。地球温暖化問題は、1985 年にフィラハで開催された「気候変動に関する科学的知見整理のための国際会議」において世界的な問題として発表された後も継続して研究が進められ、1988 年には IPCC（気候変動に関する政府間パネル）が設立されました。IPCC は現在に至るまで温暖化に関する調査研究を続けており、2007 年には第

1980年代～地球環境問題

4次報告書を公表しています。オゾン層の破壊については、1980年代に入って南極上空においてオゾンホールの存在が指摘され、1985年にはオゾン層の保護のための国際的な対策の枠組みに関する「ウィーン条約」が、1987年にはオゾン層破壊物質の削減・廃止への道筋を定めた「モントリオール議定書」が採択されました。

これらの地球環境問題への取組が進められる中、1992年にリオデジャネイロにおいて、世界180カ国の政府や国際機関の参加のもと「国連環境開発会議（地球サミット）」が開催されました。この中で地球環境問題に関する様々な合意形成が進められ、特に持続可能な開発を実現していくために必要な行動原則を示した「環境と開発に関するリオ宣言」と、これを実行するための行動計画「アジェンダ21」は、各国・各地域で現在も続けられている地球環境問題への取組の拠り所となっています。

ミニ講座　時代によって変わる環境問題

環境問題の歴史を見ると、そのとらえ方や対策の考え方が時代とともに変化してきています。特に近年は、地球温暖化など広域的かつ長期的な問題へとシフトしてきており、その対策は、より困難な課題となっています。

初期の環境問題（公害）		近年の環境問題（地球環境問題）
被害者（住民）対加害者（工場）	→	多くの人が被害者でも加害者でもある
発生地域が限定的	→	地球全体で発生
問題がとらえやすい	→	因果関係が複雑で問題把握が難しい
原因・対策が局所的かつシンプル	→	原因・対策が社会全体かつ複雑
解決にそれほど時間がかからない	→	解決に長い時間が必要

4　環境に関する取組の基本的な考え方

環境に関する取組の考え方には、大きく2つの視点があります。身近な自然や都市の環境を守り育てて、将来に伝えていくことと、地球規模の環境問題に対応し、持続可能な社会づくりを進めていくことです。そのためには、市民・市民組織・事業者・行政の4者が、お互いの特性を生かしながら、対等の立場で協力する協働の理念のもと、取組を進めていくことが重要です。

この考えのもと、福井市では2011年3月に「福井市環境基本計画」を改定し、2011年度から2015年度までの取組の指針を定めました。そして、このハンドブックは、環境に関する様々なトピックや、市民・市民組織・事業者の具体的な取組についてまとめたものであり、家庭内や地域・職場などにおける環境学習に活用できるよう作成しました。

ミニ講座　持続可能な開発（Sustainable Development）

開発と環境は互いに相反するものではなく、開発は環境や天然資源という土台の上に成り立つものであることから、環境を考慮した節度ある開発が重要です。この考えに立ち、将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発（持続可能な開発）の概念が、1980年の「国際自然保護連盟（IUCN）」、「国連環境計画（UNEP）」などが取りまとめた「世界保全戦略」に表されました。1992年の「地球サミット」では中心的な考え方として、「環境と開発に関するリオ宣言」や「アジェンダ21」に具体化され、環境に関する世界的な取組に大きな影響を与えるものとなっています。